

# 雪の日

永井荷風

青空文庫





曇って風もないのに、寒さは富士おろしの烈しく吹きあれる日よりもなお更身にしみ、火燧こたつにあたつていながらも、下腹したはらがしくしく痛むというような日が、一日も二日もつづくと、きまつてその日の夕方近くから、待設けていた小雪が、目にもつかず音もせず而降ってくる。すると路地のどぶ板を踏む下駄の音が小走りになつて、ふつて来たよと叫ぶ女の声が聞え、表通を呼びあるく豆腐屋の太い声が気のせいにわかか俄にわかに遠くかすかになる……。

わたくしは雪が降り初めると、今だに明治時代、電車も自動車

もなかつた頃の東京の町を想起するのである。東京の町に降る雪には、日本の中でも他<sup>よそ</sup>処に見られぬ固有のものがあつた。されば言うまでもなく、巴里<sup>パリ</sup>や倫敦<sup>ロンドン</sup>の町に降る雪とは全くちがつた趣があつた。巴里の町にふる雪はプッチニイが『ボエーム』の曲を思出させる。哥<sup>うた</sup>沢<sup>ざわ</sup>節<sup>ぶし</sup>に誰もが知っている『羽<sup>は</sup>織<sup>おり</sup>かくして』という曲がある。

羽織かくして、 袖ひきとめて、 どうでもけふは行か  
んすかと、

言ひつつ立つて櫺<sup>れんじまど</sup>子窓、 障子ほそめに引きあけて、  
あれ見やしやんせ、 この雪に。

わたくしはこの忘れられた前の世の小唄<sup>こうた</sup>を、雪のふる日には、

必ず思出して低ていしやう唱うたしたいような心持になるのである。この歌詞には一語の無駄もない。その場の切迫した光景と、その時の綿々とした情緒とが、洗練された言語の巧妙なる用法によつて、画えよりも鮮明に活写されている。どうしても今日は行かんすかの一句と、歌うた麿まろが『青楼年中行事』の一面とを対照するものは、容易にわたくしの解説に左袒さたんするであろう。

わたくしはまた更にためながしゆんすい為ため永春水の小説『辰巳園』に、丹たんじ次郎ろうじが久しく別れていたその情婦あだきち仇吉あだきちを深川のかくれ家がにたずね、旧歡をかたり合う中、日はくれて雪がふり出し、帰ろうにも帰られなくなるという、情緒纏てんめん綿めんとした、その一章を思出す。同じ作者の『湊みなとの花』には、思う人に捨てられた女が堀割に沿う

た貧家の一間に世をしのび、雪のふる日にも炭がなく、唯涙にくれている時、見知り顔の船頭が猪牙舟ちよきぶねを漕こいで通るのを、窓の障子の破れ目から見て、それを呼留め、炭を貰うというようなどころがあつた。過ぎし世の町に降る雪には必ず三味線の音色ねいろが伝えるような哀愁と哀憐とが感じられた。

小説『すみだ川』を書いていた時分だから、明治四十一、二年の頃であつたろう。井上唾々さんいのうえあという竹馬ちくばの友と二人、梅にはまだすこし早いことといが、と言いながら向島を歩み、百花園ひゃつかえんに一休みした後、言問ことといまで戻つて来ると、川づら一帯早くも立ちまよう夕靄ゆうもやの中から、対岸の灯がちらつき、まだ暮れきらぬ空から音もせずに雪がふつて来た。

今日もとうとう雪になつたか。と思うと、わけもなく二番目狂言に出て来る人物になつたような心持になる。浄瑠璃を聞くような軟い情味が胸一ぱいに湧いて来て、二人とも言いいあわ合あわしたようにそのまま立留つて、見る見る暗くなつて行く川の流を眺めた。突然耳元ちかく女の声がしたので、その方を見ると、長命寺ちようめいじの門前もんぜんにある掛茶屋のおかみさんが軒下のきしたの床几しょうぎに置いた煙草盆などを片づけているのである。土間どまがあつて、家の内の座敷にはもうランプがついている。

友達がおかみさんと呼んで、一杯いただきたいが、晩おそくて迷惑なら壘びんづめ詰づめを下さいと言うと、おかみさんは姉様あねさまかぶりにした手拭を取りながら、お上あがんなさいまし。何も御在ませんがと言つ

て、座敷へ座布団を出して敷いてくれた。三十ちかい小づくりの垢あかぬけ抜ぬのした女であつた。

焼海苔ちようしに銚ちようし子しを運んだ後、おかみさんはお寒いじや御在ませ

んかと親し気な調子で、置おきこ火こ燵たつを持出してくれた。親切で、い

や味がなく、機転のきいている、こういう接待ぶりもその頃にはさして珍しいというほどの事でもなかつたのであるが、今日これを回想して見ると、市街の光景と共に、かかる人情、かかる風俗も再び見がたく、再び遇いがたきものである。物一たび去れば遂にかえつては来ない。短みじ夜かよの夢ばかりではない。

友達が手て酌じゃくの一杯を口のはたに持つて行きながら、

雪の日や飲まぬお方のふところ手



と言つて、わたくしの顔を見たので、わたくしも、

酒飲まぬ人は案山子の雪見哉かな

と返して、その時銚子のかわりを持つて来たおかみさんに舟のこ  
とをきくと、渡しはもうありませんが、蒸気は七時まで御在ます  
と言うのに、やや腰を据え、

舟なくば雪見がへりのころぶまで

舟足を借りておちつく雪見かな

その頃、何や彼かや書きつけて置いた手帳は、その後いろいろな  
反古ほごと共に、一たばねにして大川へ流してしまったので、今にな  
つては雪が降つても、その夜のことは、唯人情のゆるやかであつ  
た時代と共に、早く世を去つた友達の面影がぼんやり記憶に浮ん

で来るばかりである。



雪もよいの寒い日になると、今でも大久保の家の庭に、一羽黒い山鳩の来た日を思出すのである。

父は既に世を去って、母とわたくしと二人ぎり広い家にいた頃である。母は霜柱の昼過までも解けない寂しい冬の庭に、折々山鳩がたつた一羽どこからともなく飛んで来るのを見ると、あの鳩が来たからまた雪が降るでしょうと言われた。果して雪がふつたか、どうであったか、もう能くは覚えていないが、その後も冬に

なると折々山鳩の庭に来たことだけは、どういふわけか、永くわたくしの記憶に刻みつけられている。雪もよいの冬の日、暮方ちかくなる時の、つかれて沈みきつた寂しい心持。その日その日に忘られて行くわけもない物思わしい心持が、年を経て、またわけもなく追憶の悲しさを呼ぶがためかも知れない。

その後三、四年にしてわたくしは牛込の家を売り、そこ此処ここと市中の借家に移り住んだ後、麻布に来て三十年に近い月日をすごした。無論母をはじめとして、わたくしには親しかつた人たちの、今は一人としてこの世に生残つていようはずはない。世の中は知らない人たちの解しがたい議論、聞馴れない言葉、聞馴れない物音ばかりになった。しかしそのむかし牛込の庭に山鳩のさまよつ

て来た時のような、寒い雪もよいの空は、今になつても、毎年冬になれば折々わたくしが寐ている部屋の硝子窓ガラスまどを灰色にくもらせる事がある。

すると、たちまち忽あの鳩はどうしたろう。あの鳩はむかしと同じように、今頃はあの古庭の苔の上を歩いているかも知れない……と月日の隔てを忘れて、その日のことがありありと思返されてくる。鳩が来たから雪がふりましようと言われた母の声までが、どこからともなく、かすかに聞えてくるような気がしてくる。

回想は現実の身を夢の世界につれて行き、渡ることのできない彼岸を望む時の絶望と悔恨との淵に人の身を投込む……。回想は歡喜と愁歎との両面を持っている謎の女神であろう。



七十になる日もだんだん近くなつて来た。七十という醜い老人になるまで、わたくしは生きていなければならぬのか知ら。そんな年まで生きていたくない。といつて、今夜眼をつぶつて眠れば、それがこの世の終だとなつたなら、定めしわたくしは驚くだろう。悲しむだろう。

生きていたくもなければ、死にたくもない。この思いが毎日毎夜、わたくしの心の中に出没している雲の影である。わたくしの心は暗くもならずあかる明くもならず、唯しんみりと黄昏たそがれて行く雪の

日の空に似ている。

日は必ず沈み、日は必ず尽きる。死はやがて晩おそかれ早かれ来ねばならぬ。

生きている中、<sup>うち</sup>わたくしの身に懐なつかしかったものはさびしさであった。さびしさのあつたばかりにわたくしの生涯には薄いながらも色彩があつた。死んだなら、死んでから後にも薄いながらもわたくしは色彩がほしい。そう思うと、生きていた時、その時、その場の恋をした女たち、わかれた後忘れてしまった女たちに、また逢うことの出来るのは瞑くらいあの世のさむしい河のほとりであるような気がしてくる。

ああ、わたくしは死んでから後までも、生きていた時のように、

逢えば別れる、わかれのさびしさに泣かねばならぬ人なのである  
う……。

○

薬研堀<sup>やげんぼり</sup>がまだそのまま昔の江戸絵図にかいてあるように、両  
国橋の川しも、旧米沢<sup>もとよねざわちよう</sup>町の河岸まで通じていた時分である。  
東京名物の一銭蒸汽の栈橋につらなつて、浦安<sup>うらやす</sup>通いの大きな外  
輪<sup>とわ</sup>の汽船が、時には二艘<sup>そう</sup>も三艘も、別の栈橋につながれていた時  
分の事である。

わたくしは朝寝坊むらくという<sup>はなし</sup>家の弟子になつて一年あま

り、毎夜市中諸処の寄席よせに通つていた事があつた。その年正月のしもはんつきしもはんつき下半月、師匠の取席とりせきになつたのは、深川高橋の近くにあつた、ときわちようときわちよう常磐町の常磐亭であつた。

毎日午後しつぱに、下谷御徒町したやおかちまちにいた師匠むらくの家に行き、何や

かやと、その家の用事を手つだい、おそくも四時過には寄席の樂屋に行つていなければならぬ。その刻限になると、前座ぜんざの坊主が樂屋に来るが否や、どこどんと樂屋の太鼓たいこを叩きはじめる。表口では下足番げそくばんの男がその前から通りがかりの人を見て、入らいつしやい、入らつしやいと、腹の中から押出すような太い声を出して呼びかけている。わたくしは帳場ちようばから火種を貰つて来て、樂屋と高座の火鉢に炭火をおこして、出勤する芸人の一人一人樂



屋入するのを待つのであった。

下谷から深川までの間に、その頃乗るものといつては、柳原を通う赤馬車と、大川筋の一銭蒸汽があつたばかり。正月は一年中で日の最も短い寒かんの中うちの事で、両国から船に乗り新大橋で上り、ろっけんぼり六間堀の横町へ来かかる頃には、立迷う夕霽ゆうもやに水辺の町はわけても日の暮れやすく、道端の小家には灯がつき、路地の中からは干物の匂が湧き出で、木橋をわたる人の下駄げたの音が、場末の町のさびしさを伝えている。

忘れもしない、その夜の大雪は、既にその日の夕方、両国の棧橋で一銭蒸汽を待っていた時、ぷいと横よこ面つらを吹く川風に、灰のような細い霰こまかあられがまじっていたくらいで、順番に楽屋入をする芸人

たちの帽子や外套には、宵よいの口から白いものがついていた。九時半に打出し、車でかえる師匠を見送り、表通へ出た時には、あたりはもう真白で、人ツ子ひとり通りはしない。

太鼓を叩く前座の坊主とは帰り道がちがうので、わたくしは毎げざ夜下座の三味線をひく十六、七の娘——名は忘れてしまったが、

たちたちばなばなややききつつののすすけけ  
立花家橘之助の弟子で、家は佐竹ツ原だという——いつもこの

娘と連立あたけぐらつて安宅蔵あたくらの通を一ツ目に出て、両国橋をわたり、和い泉橋ずみばし際きわで別れ、わたくしはそれから一人とぼとぼ柳原から神田を通り過ぎて番ばん町ちようの親の家へ、音のしないように裏門から忍しのび込むのであつた。

毎夜連れ立ほんじよつて、ふけそめる本所の町、寺と倉庫の多い寂し

い道を行く時、案外暖く、月のいい晩もあつた。溝川の小橋をわたりながら、鳴き過る雁の影を見送ることもあつた。犬に吠えられたり、怪しげな男に後をつけられて、二人ともども息を切つて走つたこともあつた。道端に荷をおろしている食物売の灯を見つけ、汁粉しるこ、鍋焼餛飩なべやきうどんに空腹をいやし、大福餅や焼芋に懷手をあたためながら、両国橋をわたるのは殆毎夜のことであつた。しかしわたたくしたち二人、二十一、二の男に十六、七の娘が更ふけ渡る夜の寒さと寂しさに、おのずから身を摺すり寄せながら行くにもかかわらず、唯の一度も巡查に見咎みとがめられたことがなかつた。今日、その事を思返すだけでも、明治時代と大正以後の世の中との相違が知られる。その頃の世の中には猜疑さいぎと羨怨せんえんの眼が今日

ほど鋭くひかり輝いていなかったのである。

その夜、わたくしと娘とはいつものように、いつもの道を行こうとしたが、二足三足踏み出すが早いか、雪は忽ちたちま下駄げたの齒にはさまる。風は傘を奪おうとし、吹雪は顔と着物を濡らす。しかし若い男や女が、にじゅうまわし一一重廻てぶくろやコートや手袋襟えりまき巻よそおに身を粧うことは、まだ許されていない時代である。貧家に育てられたらしい娘は、わたくしよりも悪い天気や時候には馴なれていて、手早く裾すそをまくり上げ足駄あしだを片手に足袋たびはだしになった。傘は一本さすのも二本さすのも、濡れることは同じだからと言って、相合傘あいあいがさの竹の柄元えもとを二人で握りながら、人家の軒下をつたわり、つたわつて、やがて彼方かなたに伊予橋、此方こなたに大橋を見渡すあたりまで来た時

である。娘は突然つまずいて、膝をついたなり、わたくしが扶たすけ起そうとしても容易には立上れなくなった。やつとの事立上ったかと思うと、またよろよろと転びそうになる。足袋はだしの両脚とも凍りきって、しびれてしまったらしい。

途法とほうにくれてあたりを見る時、吹雪の中にぼんやり蕎麦屋そばやの灯

が見えた嬉しき。湯気の立つ饅飩の一杯に、娘は直すぐさま様元気づき、

再び雪の中を歩きつづけたが、わたくしはその時、ふだん飲まないかんざけ爛酒を寒さしのぎに、一人で一合あまり飲んでしまったので、

歩くと共におそろしく酔が廻つて来る。さらでも歩きにくい雪の夜道の足元が、いよいよ危くなり、娘の手を握る手先がいつかその肩に廻される。のぞき込む顔が接近して互の頬がすれ合うよう

になる。あたりは高座こうざで噺家がしやべる通り、ぐるぐるぐるぐる廻まわつていて、本所だか、深川だか、処は更に分らぬが、わたくしはとかくする中うち、何かにつまずきどしんと横倒れに転び、やつとの事娘に抱き起された。見ればおあつらい通りに下駄の鼻緒はなおが切れている。道端に竹と材木が林の如く立っているのに心付き、その陰に立寄ると、ここは雪も吹込まず風も来ず、雪あかりに照された道路も遮さえぎられて見えない別天地である。いつも継母に叱られると言つて、歸りをいそぐ娘もほつと息をついて、雪にぬらされた銀杏返いちようがえしの鬢びんを撫なでたり、袂たもとをしぼったりしている。わたくしはいよいよ前後の思慮なく、唯酔の廻まわつて来るのを知るばかりである。二人の間に忽ち人情本の場面がそのまま演じ出されるに

至つたのも、怪しむには当らない。

あくる日、町の角々に雪ゆきだるま達磨ができ、掃寄せられた雪が山をなしたが、間もなく、その雪だるまも、その山も、次第に解けて次第に小さく、遂に跡かたもなく、道はすっかり乾いて、もとのように砂ほこりが川風に立迷うようになった。正月は早くも去つて、はつうま初午の二月になり、師匠むらくの持もちせき席は、常磐亭から小石川指さすヶ谷がやちよう町の寄席にかわつた。そしてかの娘はその月から下座をやめて高座へ出るようになった。小石川の席へは来なくなつた。帰りの夜道をつれ立って歩くような機会は再び二人の身には廻めぐつては来なかつた。

娘の本名はもとより知らず、家も佐竹とばかりで番地もわから

ない。雪の夜の名残は消えやすい雪のきえると共に、痕あともなく消去あつてしまつたのである。

ちまた  
巷ちまたに雨のふるやうに

わが心にも雨のふる

という名高いヴェルレーヌの詩ならに倣ならつて、もしもわたくしがその国の言葉あやつかたの操り方を知つていたなら、

巷ちまたに雪のつもるやう

うれ  
憂うれひはつもるわが胸に

あるいはまた

巷ちまたに雪の消ゆるやう

思出あとは消ゆ痕あともなく



.....

とでも吟じたことであろう。



# 青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年4月15日作成

2010年11月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雪の日

永井荷風

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>